

介護保険による戸建て住宅の屋内外改修事例「その3」 室内ドア（ドアノブ・周辺）の改修におけるポイント



さいとう かずのぶ
齊藤 一修さん
齊藤建築代表
大工
地元大手建設会社の現場監督から工務店に転職し、大工の経験を積む。その後、30代で“一人親方”の大工として独立し、9年前に仕事の幅を広げるべくFJC 2級検定試験に合格。新築、リフォーム、エクステリア等のさまざまな事例を手がける。愛知県在住。

これまでの「手すりの設置」・「段差解消」に加え、「ドアの変更」も、戸建て住宅の介護保険による改修では、需要の多い項目です。特に狭い日本の住宅事情で開閉時に廊下をふさいでしまうようなドアは、使い勝手の問題だけでなく、転倒の原因にもなり危険です。今回もFJC 2級をもつ大工の齊藤一修さんの手がけた事例より、ドア周辺の改修に絞ってご紹介します。

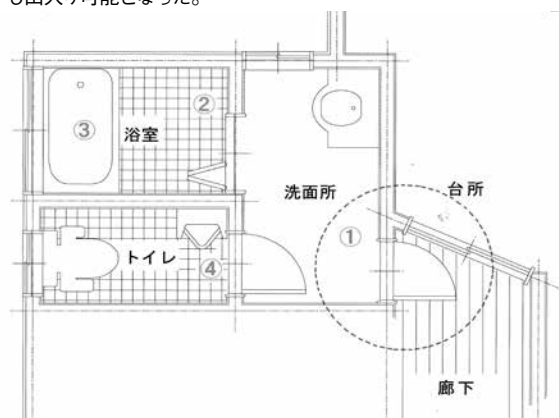
ドアから引き戸へ
改修により自立度はUPする

古い家によく見られる丸い握り玉のドアノブが付いたドア。足腰が弱くなった高齢者にとっては、いろいろと使いにくさが出てくるものです。例えば、手前に開ける際には体を引いたり左右にひねるなどしてドアを避けなければならず、反対に押して開ける際に

ドアをスライドタイプに変更し、開口時のドアの突き出しを3分の1に縮小

以前は手前に開けるドアだったが、廊下側から開けると前をふさいでしまうかたち（図面）。

①②浴室、トイレの改修時にドアの変更も行った。ただ、脱衣所側には洗面台の横に洗濯機があり、引き戸の設置はできないため、多少、費用はかさむがスライドタイプを選択した。開口時のドアの出っ張りは約3分の1に縮小され、将来、車いすになったとしても出入り可能となった。

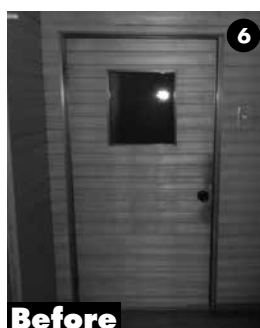
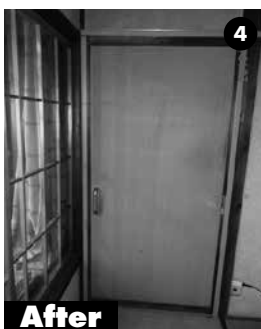


ドアから上吊り引き戸に、ドア板をそのまま生かして変更



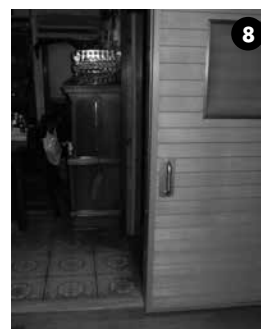
③改修前。廊下側に開く和室のドア（右側に金具の把手が付いている）。真壁の和室のため、ドアをぶら下げる下地がない。

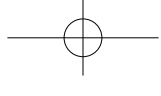
④⑤改修後。樹脂製のレールと枠を取り付け、把手位置を左にし、右側へ動く引き戸へ変更。レール分だけ上に浮くので量にもすらない。



⑥改修前。壁と揃いの天然の木目が味のあるドア。依頼主よりドアを生かしてほしいと要望があった。

⑦⑧改修後。左の事例と同じ樹脂製のレールと枠を取り付け、把手位置を左にし、右側へ動く引き戸へ変更。樹脂の枠の色が木目になじみ、違和感のない仕上がりに。





は、ドアノブにあずけた体重でドアノブを握ったまま前に体が引つ張られ、つまづきや転倒の原因にもなっていました。ましてや、そこに段差があれば、より危険度は増すでしょう。

そこで、できる限り安全に開閉できるように改修を行うわけですが、どのように改修するかは、ドアの取り付けられている位置、周囲の環境、スペースなどにより決まります。概ね①上吊りの引き戸、②折れ戸、③その他（スライド式ドアなど）の3つのタイプのどれか、となります。

「ドア周りの改修はとにかく喜ばれますね。皆さん、ドアが変わっただけで、こんなに楽になるとは思わなかった」と。きつと不便さは感じておられるものの「仕方ない」と諦めて使っている人が多いのだと思います。ドアの開閉が楽になれば、室内での生活動作の自立度も格段に上がります。特に、最近の引き戸にはソフトクローズ機能が付いていますから、開けるときに多少の力はいらしますが、あとは自然に閉まるので、車いすの方でも楽に使える。ドアの変更は、改修の依頼項目にはなくとも、手すりの設置などに訪れた際、こちらから提案することもよくあります」と、斉藤さんは言います。

ただし、築年数が経てば、家は傾き歪みが生じるので、設置には注意が必要です。

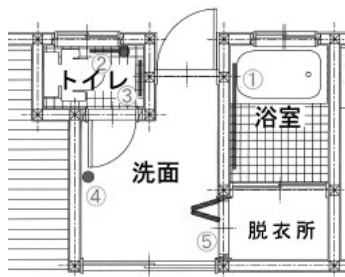
ドアから アウトセット式 引き戸に

⑨改修前。ドアが開くと階段下の廊下はかなり狭くなり、通りにくかった。

⑩⑪改修後。ドアの上と横の壁に十分な余裕があったため、これまでの開口部よりもひと回り大きい既製のアウトセット式引き戸を取り付けて対応。手間もかからず仕上がりもきれい。



ドアを折れ戸に交換し、開閉時の省スペース化を図る



⑮改修前。古い市営住宅の浴室のドア。脱衣所はなく台所で服を脱いで入る。段差のある浴室側に開くため、ドアに体重をかけて開けると前のめりになって、つまづいてしまい危険だった。

⑯改修後。軽い樹脂製の折れ戸に交換。また、浴室の床はウッドデッキに使う木材でかさ上げし、段差解消も行った。ドアの開口部が半分になったことで、シャワーチェアを置けるようになった。



⑫改修前。前開きのドアが右に開くため、廊下から洗面室に入る際、入り口を塞いでしまっていた。すぐ横に出入り口があるため、ドアがないと冬場は寒い。しかし、引き戸にするにも横の壁に洗濯機がある（図面）。

⑬⑭改修後。開口時の突き出しが半分ですむ折れ戸にし、左側に開くように変更。これなら廊下から入る動線も遮らない。認知症が進行中の高齢者の依頼主だったが、「使いやすくなった」と喜ばれた。

古い家のドア改修は、
水平垂直を正確に測る

経年により、家はどうしても床や天井と壁が微妙に水平垂直からずれてきます。特に写真①②のスライドドアなどは既製品のため、水平・垂直のどちらかがずれたまま設置すると、きちんと機能しません。たとえば、床や天井を信用して垂直を測っても、正確な垂直ではないので要注意。レーザー墨出し器を使ってきっちりと水平垂直を測ってから設置することが重要です。

「その点、上吊りの引き戸は、水平さえしっかりと決めれば多少の歪みはカバーできるメリットがあります。ただ、床が傾いていれば、床からの隙間が片方は5ミリ、もう片方は1センチということになってしまいますが、その程度は許容範囲でしょう」（斉藤さん）

また、写真②③は、戸建て住宅ではなくマンションの改修ですが、苦肉の策で（一段の距離が長い）踏み台の設置として介護保険の申請（名目は「段差解消」）を認めてもらった事例です。

「住宅改修の答えは一つではない」という斉藤さん。大切なのは、そこで依頼主が安心・安全に生活できるか。FJCの視点と交渉術で、限りなく正解に近い答えを導き出していくためのセミナーを開催する予定です。

（取材・文／安藤直子）

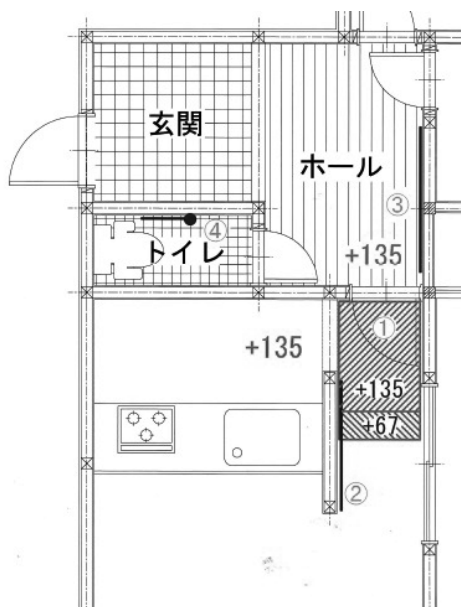
ドアノブのみの交換で対応

①⑦改修前の和室側のふすま風ドア。まひが残る依頼主には把手が使いづらい。

①⑧改修前の廊下側のドア。握り玉型のドアノブでは、握って回す動作ができない。①⑨②③和室・廊下側ともにレバーハンドル型の把手に変更。



マンションの段差のあるドア前に設置した距離の長い踏み台



玄関ホールからドアを開けると、すぐに段差が13.5cmある（図面）。



②①改修前。リビングダイニング側から見たドア。ドア前のすぐ左側はキッチン入り口で、ここも13・5cmの段差。手すりを付けることもできず、杖を使用しての歩行には危険。

②②改修後。思い切って壁があるところまで踏み台2段目を延ばし、左側に手すりを設置。

※「福祉住環境住宅改修セミナー」についての問い合わせは「あい福祉住環境研究会」（メール：mi-0412-ta@io.ocn.ne.jp）まで。